

三 明治大学史の企画展について

阿部 裕樹

はじめに

本稿の目的は、明治大学史の「企画展」の、過去・現在について再確認し、これを踏まえて、今後の「企画展」の可能性・方向性を探ることにある。なお本稿では、常設・非常設という視点から、本書第一章で詳しく述べられている「大学史展」、本稿第一節で述べる「小史展」、同じく第二節で述べる「地方展」を含めた意味で「企画展」という用語を用いるが、具体的には、①一九九九（平成一一）年二月より開催している「小史展」、ならびに②二〇〇四（平成一六）年より開催している「地方展」を対象の中心とする。さて、本論に入る前に、「大学史展」について、ごく簡単にではあるが、確認しておかなければならない。と言うのも、特に一九九三（平成五）年以降に開催された「大学史展」（本書第一章、鈴木秀幸論文参照）と、本稿で扱う過去の「小史展」には、「大学史展示室」を構想・実現する上で、結果としてかもしれないが、密接な関係があったからである。

まず、なんと言っても、一九九三年以降に開催された四回の「大学史展」は、たしかに単発でおこなわれた展示会ではあったが、経験や反省が次回以降の展示会に活かされ、遂には「大学史展示室」

にも直結していた点が指摘できる。

また、学内の一大イベント（創立一二〇周年やリバイタワー竣工記念等）の一環として展示会を開催することにより、集客力が向上し、あらゆる面で、大学当局のバックアップを受けられたことも、事実として胸に留めておくべきである。展示会というのは、明治大学史資料センター事務室にとって、学内外へのアピールの、ひとつの媒体となりうるからである。

したがって、本稿では、今後の「企画展」が「大学史展示室」の実現を目指す段階から、新たな段階を迎えていることを、踏まえなければならぬのである。

1 小史展について

本節では、「企画展」のひとつ、「小史展」について、その誕生、歴史、現状について見た後、課題について述べてゆきたい。

また「小史展」は、今後も発展させつつ継続させたいと考えているが、その理由については、本稿の最後に述べたい。

(1) 小史展の誕生

明治大学史資料センター事務室（および、その前身・歴史編纂事務室）では、一九九九（平成一一）年二月より、表1にあるように「小史展」を開催してきた。また、二〇〇〇（平成一二）年五月からは、和泉キャンパス・中央校舎にて和泉小史展を開催してきた。本項では、その紹介をおこない、その上で「小史展」の今後について考えてゆきたい。

表1 明治大学小史展一覧

| 回 | タイトル | 期間 | 種類 | 出典 |
|-----|--------------------------------|-----------------------|-----|-----|
| 駿1 | 学園をみまもってきた記念館 | 1999/ 2/25～ 5/31 | テーマ | 26集 |
| 駿2 | 神田・お茶の水と明治大学 | 1999/ 6/15～10/25 | テーマ | 21集 |
| 駿3 | ある戦没学生の生涯 | 1999/10/26～2000/ 1/31 | テーマ | 21集 |
| 駿4 | 最近・明治大学史料の収蔵展 | 2000/ 3/ 1～ 5/31 | 新資料 | 22集 |
| 駿5 | 記念品・記念物に見る明治大学史 | 2000/ 6/ 9～10/30 | テーマ | 22集 |
| 駿6 | 証(あかし)・識(しるし)の明大史 | 2000/11/10～2001/ 2/28 | テーマ | 22集 |
| 駿7 | 2000年度大学史料新蔵展 | 2001/ 3/26～ 6/30 | 新資料 | 24集 |
| 駿8 | 記念式典の歴史 | 2001/12/ 7～2002/ 2/28 | テーマ | 24集 |
| 駿9 | 女子部・女子専門学校の歩み | 2002/ 3/ 1～ 5/31 | テーマ | 24集 |
| 駿10 | 2001年度大学史料新蔵展 | 2002/ 6/26～10/31 | 新資料 | 24集 |
| 駿11 | 絵で見る明治大学の歩み | 2002/11/25～2003/ 2/28 | テーマ | 25集 |
| 駿12 | 思い出の入学・卒業 | 2003/ 3/28～ 5/31 | テーマ | 25集 |
| 駿13 | 2002年度大学史料新蔵展 | 2003/ 6/24～10/20 | 新資料 | 25集 |
| 駿14 | 明治大学の創立者 | 2003/11/11～2004/ 1/26 | テーマ | 25集 |
| 駿15 | 草創期明治法律学校を支えた人々 | 2004/ 2/13～ 5/ 7 | テーマ | 25集 |
| 駿16 | 2003年度大学史料新蔵展 | 2004/ 6/ 4～11/ 8 | 新資料 | 26集 |
| 駿17 | 記念館からリパティタワーへ —明治大学・歴代の校舎展— | 2004/11/16～2005/ 4/21 | テーマ | 26集 |
| 和1 | 明治大学和泉小史展 | 2000/ 5/26～ 6/26 | 和泉 | 22集 |
| 和2 | 明治大学和泉小史展 | 2001/ 5/21～ 9/25 | 和泉 | 24集 |
| 和3 | 明治大学和泉小史展 | 2002/ 6/ 3～10/ 7 | 和泉 | 24集 |
| 和4 | 明治大学和泉小史展 | 2003/ 6/16～ 9/30 | 和泉 | 25集 |
| 和5 | 明治大学創立者岸本辰雄展 | 2004/ | 和泉 | 26集 |

(注)「出典」は『歴史編纂事務室報告』および『明治大学史資料センター事務室報告』の巻号を指す。

「小史展」の構想については、一九九八（平成一〇）年一二月一四日付けの文書「大学史料のミニ展示について（案）」（『歴史編纂事務室報告』第二〇集一二八〜一二九頁所収、一九九九年）から窺える。以下、この資料を中心にみてゆきたい。

まず、展示の位置付けであるが、「大学史料を学内外の方々によく紹介し、明治大学および明治大学史への理解と協力を求める」ことを目的とし、内容は「テーマを設けて明治大学史上の出来事を扱い、「また寄贈された史料をいち早く紹介し、あわせて寄贈者への謝意を示す」としている。つまり、①テーマ展示と②新蔵資料紹介展示の二本柱体制の表明と言える。表1の種類欄は、このことを付記している。

また、「時折、展示替え」をおこなうとしている。表1からわかるように、駿河台キャンパスで年間三回、和泉キャンパスで年間一回開催していることがわかる（ただし、前記資料が作成された時点では、和泉小史展は構想されていない）。開催の中心となっている駿河台キャンパスでは、おおよそ、テーマ展示が年間二回、新蔵資料紹介展示が年間一回となっている。

会場は、駿河台キャンパス・学生会館一階で、「経費」は「歴史編纂事務室の経費で賄う」としているが、後述するように、この点には課題がある。

展示に関わる備品については、「歴史編纂事務室所有」（以前は明治大学商品博物館使用）の木製「展示ケース」（縦九五×幅二七五×奥行六〇、単位はセンチメートル）二台を使用するとある（第一回から第一五回まで使用）。前記資料にはないが、その他小さな展示台なども利用した。第一六回からは、前記「展示ケース」を、以

前明治大学博物館で使用されていた木製展示台（縦一一〇×幅一八五×奥行七五、単位はセンチメートル）二台へと交換した。この展示台は、以前のものと比べ軽量で扱いやすく、施設設備もより安全性の高いものである。また第一七回からは、展示台として木製の台（縦一一〇×幅一八〇×奥行四五、単位はセンチメートル）を一台、学内備品担当部署である管財部用度課との交渉により獲得している。同様に、和泉小史展についても、「和泉校舎における歴史展の開催について」（『歴史編纂事務室報告』第二二集一一一頁所収、二〇〇〇年）を中心にみてゆきたい。

前記資料によると、「和泉校舎の学生、とりわけ新入生に明治大学の歴史を知らせる」ことを目的として、「一〇枚くらい」の「写真（パネル付）」を用いるとしている。写真パネルを用いるのは、会場や資料管理の制約上、モノ資料が展示できないためである。内容については、第一回（二〇〇〇年）から第四回（二〇〇三年）までは、創立者や歴代校舎等で大まかな大学の歴史を紹介するとともに、和泉キャンパスの歴史を紹介するものであった。特に回を重ねるにつれて、後者を重視した展示となっていた。つまり、和泉キャンパスという立地と、同キャンパスが、明治大学に入学して日が浅い文系学部の一・二年次の学生が学ぶ場であるという特性を前提としているのである。

また、駿河台キャンパスにある歴史編纂事務室が、和泉キャンパスで展示会をおこなう上で、「和泉校舎事務部長」・「和泉校舎庶務課」・「等」を「協力部署」としている。離れた場所で展示会をおこなう上で、展示会場に近い関係各位の協力は不可欠なのである。しかし、「備考」として、「設置・撤去・巡回等は、おもに歴史編纂事

務室が行なう」とあり、出来る限りは歴史編纂事務室で運営するところが明記されている。

会場は「和泉校舎内」の「協力部署・協力者が指定するところ」とあるが、具体的には第一校舎一階ロビーで開催している。

以上、「小史展」を開催する上での、おもに前段階を紹介した。

(2) 小史展の歴史

以下では、過去に開催された「小史展」の内容について、会場で配布されていた「パンフレット」をもとに、編年順に、簡単にではあるが振り返ってゆきたい。なお「パンフレット」は、『歴史編纂事務室報告』およびその後継誌である『明治大学史資料センター事務室報告』で紹介されている。表1の出版欄を参照の上、御覧いただきたい。

第一回明治大学小史展は、「学園をみまもってきた記念館」と題して開催された。開催期間は一九九九（平成一一）年二月二十五日から五月三十一日まで、内容は歴代の記念館の歴史を振り返るテーマ展示会であった。

展示品のひとつ「旧記念館模型」は、現在「大学史展示室」に展示されている。また、ちょうどこの時期は、前年の九月に駿河台キャンパス内に新校舎「リバティタワー」の竣工式がおこなわれた直後でもあり、心の拠り所ともなる校舎の転換期であった。

第二回明治大学小史展は、「神田・お茶の水と明治大学」と題して開催された。開催期間は一九九九年六月一日から一〇月二十五日まで、内容は一八八六（明治一九）年以来、明治大学がキャンパスを構えている神田・お茶の水界隈の移り変わりを資料で振り返るテ-

マ展示会であった。記念館とその周辺が写る航空写真をはじめ、考古学博物館（当時）蔵の記念館遺跡発掘品なども展示された。

第三回明治大学小史展は、「ある戦没学徒の生涯―政治経済学部生・武石益則」と題して開催された。開催期間は一九九九年一〇月二六日から二〇〇〇（平成一二）年一月三十一日まで、内容は一九九九年六月に広島市在住の富樫直子氏より寄贈された資料を紹介する新蔵資料紹介展示会であったのだが、戦争と明治大学というテーマを持つため、表1ではテーマ展示会とした。

展示品の「予科時代の成績表」や「予科時代の学習ノート」は、現在「大学史展示室」に展示されている。

第四回明治大学小史展は、「最近・明治大学史料の収蔵展」と題して開催された。開催期間は二〇〇〇年三月一日から五月三十一日まで、内容は「ここ1・2年」に歴史編纂事務室に寄贈・移管された資料を展示する新蔵資料紹介展示会であった。

展示品の「宮城浩蔵の葉書」や「植村直己色紙」、「女子寮寮則」は、現在「大学史展示室」に展示されている。

またこの間、第一回明治大学和泉小史展がはじまった。開催期間は二〇〇〇年五月二六日から六月二六日まで、内容は明治大学創立者、駿河台キャンパスの歴代校舎、そして、かつての和泉キャンパスの写真（開設したころのようすや昭和初期の校舎）などが展示された。前項で述べたように、全てが写真パネルで展示された。

第五回明治大学小史展は、「記念品・記念物に見る明治大学史」と題して開催された。開催期間は二〇〇〇年六月九日から一〇月三〇日まで、内容は明治大学の「長い歴史においてつくられたいくつかの記念品・記念物を紹介する」テーマ展示会であった。

展示品の「野球部功労祝盃」や「開学記念碑（ミニチュア）」は、現在「大学史展示室」に展示されている。

第六回明治大学小史展は、「証（あかし）・識（しるし）の明大史―証書・校章・表札―」と題して開催された。開催期間は二〇〇〇年十一月二〇日から二〇〇一年（平成一三）年二月二十八日まで、内容は「証書類、校章・マーク類、表札類」を展示するテーマ展示会であった。

展示品の「聴講券」や「生徒証」、「正門の門標」は、現在「大学史展示室」に展示されている。また二〇〇一年は、明治大学創立一二〇周年にあたり、「一二〇年の伝統を受け継ぎ、さらに新世紀に向けて大きく飛躍上昇する明治大学」（『2003 MEIJI UNIVERSITY-TY CONCEPT & GUIDE BOOK』巻頭）をイメージして作成された新ロゴマークが選定された年であった。

第七回明治大学小史展は、「二〇〇〇年度大学史料新蔵展」と題して開催された。開催期間は二〇〇一年三月二十六日から六月三日まで、内容は「二〇〇〇年度」に歴史編纂事務室に寄贈・移管されたり、購入した資料を展示する新蔵資料紹介展示会であった。

展示品の「木下順二原稿」や「古賀政男のギター」、「経済学講義完」（アッペール著）は、現在「大学史展示室」に展示されている。

この間、第二回明治大学和泉小史展がはじまっている。開催期間は二〇〇一年五月二一日から九月二十五日まで、内容は前回展示の一部を展示替えした内容で、新たに『「京王電車沿線名所図会」にみる予科』、「中庭から見た和泉校舎」等が展示されている。前回から引き続き、全てが写真パネルで展示された。

第八回明治大学小史展は、「記念式典の歴史」と題して開催された。開催期間は二〇〇一年二月七日から二〇〇二年（平成一四）年二月二十八日まで、内容は、当時「創立一二〇周年を迎え」た明治大学で開催されていた式典や行事をふまえ、「明治大学における記念式典の歩みをふりかえる」テーマ展示会であった。

展示品は、明治大学の創立二〇周年、三〇周年、五〇周年、六〇周年、七〇周年、八〇周年、一〇〇周年、そして直前に開催された一二〇周年の記念式典関係資料が展示された。

第九回明治大学小史展は、「女子部・女子専門学校の歩み」と題して開催された。開催期間は二〇〇二年三月一日から五月三十一日まで、内容は「明治大学の歴史だけではなく日本の高等教育史にとって画期的な出来事」であった「女子高等職業教育をめざして明治大学に」「開設された」「女子部」に関するテーマ展示会であった。

この展示会は、現在の「大学史展示室」のテーマ・ゾーン「女子部の時代」の基礎となっている。「大学史展示室」には、この小史展で展示された写真をはじめ、「女子専門学校門標」や「女子部設立趣旨書」などが展示されている。

第三回明治大学和泉小史展は、二〇〇二年六月三日から一〇月七日の会期で開催された。今回も前回展示の一部を展示替えした内容で、新たに「予科祭のデコレーション『誰がために鐘が鳴る』」、「図書館」等が展示されている。引き続き、全てが写真パネルで展示された。

第一〇回明治大学小史展は、「二〇〇一年度大学史料新蔵展」と題して開催された。開催期間は二〇〇二年六月二十六日から一〇月三十一日まで、内容は「二〇〇一年度」に歴史編纂事務室に寄贈・移管

されたり、購入した資料を展示する新蔵資料紹介展示会であった。展示品の「女子部制帽」は、現在「大学史展示室」に展示されている。

第一一回明治大学小史展は、「絵で見る明治大学の歩み」と題して開催された。開催期間は二〇〇二年一月二五日から二〇〇三年（平成一五）年二月二八日まで、内容は明治大学の歴史を「絵画・版画と絵葉書で振り返る」テーマ展示会であった。

展示品の「敗戦直後の授業風景」や「駿河台 明治大学」は、現在「大学史展示室」に展示されている。

第一二回明治大学小史展は、「思い出の入学・卒業」と題して開催された。開催期間は二〇〇三年三月二八日から五月三一日まで、内容は「明治大学の入学・卒業に関する史料」を展示するテーマ展示会であった。

なお、会期中の四月一日の改組に伴って、「主幹」が歴史編纂事務室から明治大学史資料センター事務室に代わっている。

また、第四回明治大学和泉小史展は、二〇〇三年六月一六日から九月三〇日の日程で開催された。今回も前回展示の一部を展示替えた内容で、新たに「庭園工事」等が展示されている。引き続き、全てが写真パネルで展示された。

第一三回明治大学小史展は、「二〇〇二年度 大学史料新蔵展」と題して開催された。開催期間は二〇〇三年六月二四日から一〇月二〇日まで、内容は「二〇〇二年度」に歴史編纂事務室に寄贈・移管されたり、購入した資料を展示する新蔵資料紹介展示会であった。

第一四回明治大学小史展は、「明治大学の創立者」と題して開催された。開催期間は二〇〇三年一月一日から二〇〇四（平成一

六）年一月二六日まで、内容は明治大学創立者である岸本辰雄・宮城浩蔵・矢代操に「関係する資料により、創立時を振り返る」テーマ展示会であった。

この展示会は、現在の「大学史展示室」のシンボル・ゾーン「創立者」へと連なっており、「大学史展示室」には、「司法省法学校生徒成績上申書」や岸本辰雄の「書簡」、矢代操の「辞令」などが展示されている。

第一五回明治大学小史展は、「草創期明治法律学校を支えた人々」と題して開催された。開催期間は二〇〇四年二月一三日から五月七日まで、前回の続編とも言うべき内容で、明治大学創立者の周辺人物にスポットを当てたテーマ展示会であった。

なお会期中に、「大学史展示室」が開室しており、以後の「小史展」は新たな段階を迎える。このことについては、後ほど「小史展の課題」の中で考察する。

以上が過去に開催された明治大学小史展、および和泉小史展の概要である。本項の最後に一点だけ述べておきたいのは、特に明治大学小史展の場合「大学史展示室」への連続性が指摘できることである。つまり、「小史展」で紹介された資料が、「大学史展示室」において現に展示されているのである。つまり、最初に述べた「大学史展」と「小史展」との類似性を指摘できるのである。

(3) 小史展の現状

ここでは、明治大学小史展の現状について述べてゆきたい。具体的には、筆者が担当した二〇〇四（平成一六）年度以降の明治大学小史展のうち、第一七回明治大学小史展「記念館からパティタワ

へー明治大学・歴代の校舎展——」（二〇〇四年一月より二〇〇五〔平成一七〕年四月まで開催予定）と、第五回和泉小史展「明治大学創立者 岸本辰雄展」（二〇〇四年七月より二〇〇五年四月頃まで延長開催予定）を事例としたい。

では、まず第一七回明治大学小史展「記念館からリバティタワーへー明治大学・歴代の校舎展——」について、資料1や「パンフレット」（本書一〇六〜一〇九頁）などを参考としながら見てゆきたい。駿河台キャンパスは、一九二一（明治四四）年以来、明治大学の中核となっているキャンパスである。特に、一九二八（昭和三）年に竣工し、一九九五（平成七）年まで君臨した「旧記念館」（以下では「三代目記念館」と表記する）は、多くの校友や教職員にとつての心の拠り所ともなり、また駿河台という街のシンボルともなっていた。

しかし、一九九八（平成一〇）年のリバティタワー竣工、つづく二〇〇四年のアカデミーコモン竣工は、キャンパスの様相を大きく変貌させ、ふたつの新校舎は、都心型大学・明治大学の顔として、また駿河台の新シンボルとしての歴史を刻み始めている。

リバティタワーが竣工してから二〇〇五年で七年が経過し、現在は駿河台キャンパスに通学する学生の大多数にとって「三代目記念館」は過去の校舎であり、存在すら知らない学生も多いように思う。

そこで、駿河台キャンパスを中心にした校舎の「小史展」を企画したのである。

内容は、大学・駿河台のシンボルであった歴代記念館の写真・絵画の展示、「三代目記念館」の設計図や、さよならイベントのようす、リバティタワーの建設工事のようすや屋上からの展望写真を展

示している。タイトルで新校舎・アカデミーコモンではなく「リバティタワー」を前面に出したのは、現在、駿河台キャンパスに通学する学生の拠点がリバティタワーにあるためである。

なお、展示会場には「パンフレット」を用意し、見学者の便に供している。

広報活動としては、①駿河台キャンパス内（大学会館入口、リバティタワー入口、同三階学生課掲示板）にポスターを掲出、②学内電子掲示板（大学会館、一二号館、アカデミーコモン、リバティタワーに設置）での案内、③学内各部署への「パンフレット」の送付、④広報部を通じて「明治大学広報」への記事掲載をおこなった。

次に、第五回和泉小史展「明治大学創立者 岸本辰雄展」についてであるが、同様に資料2や「パンフレット」（本書一〇〇〜一一三頁）などを参考とし



第17回明治大学小史展「記念館からリバティタワーへ——明治大学・歴代の校舎展——」のようす（左右とも）



第5回和泉小史展「明治大学創立者 岸本辰雄展」

ながら見てゆきたい（写真参照）。先に述べたように、「和泉小史展」は過去四回、明治大学の歴史を取り上げつつも、和泉キャンパスのようすを中心とした写真展であった。和泉キャンパスで展示をおこなうにあたり、その地域的特性を重視したためである。

しかし、四年間にわたり和泉キャンパス展を開催したことで、「和泉」にこだわる展示を替えてみようと考えた筆者は、明治大学創立者のひとりである岸本辰雄をテーマとすることとした。

これまでの和泉小史展でも、明治大学の創立者として岸本辰雄・宮城浩蔵・矢代操の写真パネルを展示しており全く初めてはなかったこと、筆者が鳥取市で開催された「明治大学創立者 岸本辰雄展」（第二節で詳述する）に携わっていたことなどが理由であるが、後で述べるように「小史展」が新たな段階を迎えつつあると考えたことも遠因である。

内容は、岸本辰雄の肖像や関係史料で生涯を概観するもので、他に、明治大学の前身である明治法律学校の設立趣旨や、岸本辰雄を公私にわたって支えた周辺人物の写真を加えた。

なお、展示会場には「パンフレット」を用意し、見学者の便に供している。

広報活動としては、広報部を通じて「明治大学広報」への記事掲

載をおこなった。

以上が、最新の「小史展」の現状である。

(4) 小史展の課題

本項では、これまで見てきたことを踏まえ、「小史展」の課題について述べてゆきたい。しかし、課題には二種類ある。つまり、具体的な展示技術や方法の問題、換言すれば展示場での問題と、「小史展」の運営面での問題、換言すれば事務室での問題である。

まず、前者・展示場での問題について考えてゆきたい。ここで与えられた課題は、駿河台・和泉ともに、①展示専用のスペースではないことと、②和泉におけるモノ資料展示の検討である。

最初に①についてである。これには功罪がある。

まず、功罪の功である。明治大学小史展を開催しているのは、既述のとおり駿河台キャンパス・大学会館一階ロビーである。展示の向かいには、学内者・学外者が休憩したり、息をとったり、談話が出来るように、ベンチが置かれている（写真参照）。したがって、展示会を見に行こう・行きたいという動機が無い人を含め、不特定多数の人の目に触れるのである。そして、意識的に展示ケース内を覗かない、無意識で写真パネルを眺めるだけの観客も含めると、相



大学会館1階ロビー（展示スペースの向かい）

当数の見学者を有しており、正確な数値はカウントしていないが、その数は「大学史展示室」を超えていると考えられる。これは、何事にも代えられない場所の功である。

しかし、罪もある。資料管理上の問題を抱えているのである。要点は三点で、ア、資料盗難の危険があること（常駐の専門職員が配置されていないこと）、イ、専用照明がなく、紫外線防止の措置もなされておらず、時に自然光が入ること、ウ、この場所が喫煙所であることである。つまり、資料を展示する場としては、最悪の部類に属するのである。

また、和泉キャンパス・第一校舎一階ロビーも、禁煙となっていない点だけが大学会館一階ロビーよりは恵まれているが、ほぼ同様の環境である。

抜本的な解決策はない。しかし、日頃からメンテナンスに気を配ることや、極力複製資料を使用すること、また短いスパンで展示替えすることなどでリスクを減少させることは可能である。

次に②に関しては、特に管理上の問題をクリアしなければならぬ。具体的には、ア、盗難と、イ、メンテナンス、つまり清掃の問題である。和泉キャンパス内の部署との連携が不可欠となるが、定期的なメンテナンスとなれば業務の増加となる。当該部署と明治大学史資料センター事務室とで、十分な打合せが必要となつてこよう。

次に、後者・事務室での課題である。具体的には、①広報活動の充実、②生田キャンパスでの開催、③独自予算の獲得、そして、④今後の展示テーマの検討、「小史展」の開催意義の問題が考えられる。

まず①の課題である。これは、長い間課題として残っている。要

は、限られた予算で、最大の効果を挙げうるような広報手段を確立することである。当面考えられる手段としては、第一七回明治大学小史展で実施した、ア、駿河台キャンパス内（大学会館入口、リバティタワー入口、同三階学生課掲示板）にポスターを掲出、イ、学内電子掲示板（大学会館、一二号館、アカデミーコモン、リバティタワーに設置）での案内、ウ、学内各部署への「パンフレット」の送付、エ、広報部を通じて「明治大学広報」への記事掲載に加え、二〇〇四年度オープンした「明治大学史資料センターホームページ」(<http://www.meiji.ac.jp/history/>)を通じて公告が考えられる。

また将来的には、各地で開催される大学の行事（父母会、校友会等）での宣伝や、友の会のような組織ができれば、この組織を経由した告知なども考えられる。また、特に筆者が探りたいのが、学生への有効な告知方法である。ぜひ、自分が通う大学の歴史について、見て、感じてもらいたいからである。

続いて②の課題である。明治大学の歴史は駿河台だけで刻まれてきたわけでは決していない。しかし、駿河台キャンパスにのみ明治大学史資料センターの専用スペース・人員が配置されている現状では、クリアすべき課題が多い。ただ、既に述べた和泉小史展を開催しているのだから、生田キャンパスにおいても生田小史展を、近い将来、ぜひ開催したい。

また将来、第一章で述べられている「大学史展」クラスの展示会を、和泉や生田で開催することも検討したい。理系学部の周年記念や、キャンパスの開設周年記念などでイベントが開催されるのであれば、明治大学史資料センターは積極的に参画すべきである。

続いて③の課題である。現在、明治大学史資料センターには展示

事業独自の予算は「小史展パンフレット」制作費のみである。したがって、パネル制作や消耗品・備品購入などは他の業務との兼ね合いとなっている。結果、できる限りすでに所蔵している資料（過去に制作したパネル等を含む）で、既にある備品類を用い、展示を企画してゆくことが求められている。

また一方で、明治大学史資料センターには、学内関係者および多くの校友の御好意により、毎年多くの新蔵資料が寄贈されている。しかし、こうした実情からすれば、移管・寄贈された資料をいち早く、数多く展示するためにも、展示に関係する予算をスムーズに執行できる方法を考えてゆかなければならない。

そして、③を進める上で必要なのが、④今後の魅力ある展示テーマの検討である。これは、「小史展」の開催意義の問題とも関わる。一年に一度おこなう新蔵資料紹介展示は、資料寄贈者への感謝とともに、新蔵資料をいち早く紹介する場であり、テーマ展示とは性格が違う。しかし、一年に数回おこなうテーマ展におけるテーマ設定は重要な課題である。過去の「小史展」を見ても明らかのように、「小史展」も「大学史展示室」に直結する場であった。決して単発の展示会ではなかったのである。

今後、「小史展」での先行公開を終えた資料のうち、更に別の展示会にて公開をする場合、ふたつのコースが考えられる。

ひとつが、将来おこなわれる「大学史展示室」のテーマ展示コーナーの展示替えである。現在、大雑把に言えば、「女子部」、「サークル」、「校友」の三つのテーマ展示をおこなっているが、現に「女子部」のコーナーは、第九回明治大学小史展「女子部・女子専門学校の歩み」が前提となっている。したがって、今後開催される「小

史展」を土台として、「大学史展示室」のテーマ展示コーナーが企画される可能性があるのである。

もうひとつが、「大学史展」(第一章参照)と「地方展」である。

「地方展」に関する詳細は、第二節で述べるので、ここでは指摘だけに留めておく。

2 地方展について

本節では、「地方展」を扱う。「地方展」とは、明治大学史資料センター所蔵の資料を中心として、明治大学の施設ではなく、地方で展示会をおこなうことである。

(1) 地方展の構想と現状

通常の博物館において特別展、または企画展と称される展示会は、日頃の研究成果の発表の場であるとともに、入館者の確保のためにおこなうことが多い。したがって、普通出張はしない。しかし、明治大学史資料センターの「企画展」は、必ずしも明治大学内で開催する必要はないのではなからうか。むしろ、全国・全世界で活躍する校友の目に触れるために、また大学と校友がさらに交流を深める場としての「地方展」には、非常に大きな魅力がある。これは、出張できない(やることを目的としていない)「大学史展示室」や、通常の博物館における特別展・企画展に対する、明治大学史資料センターの「企画展」の最大の特徴となりえよう。

さて、現時点での構想であるが、まずは創立者(岸本辰雄↓鳥取出身、宮城浩蔵↓天童(山形県)出身、矢代操↓鯖江(福井県)出

身)の出身地への出張を考えている。二〇〇四(平成一六)年度の鳥取写真展(実施済、後述)、二〇〇五(平成一七)年度の鳥取展示のあとには、二〇〇六(平成一八)年度に天童写真展、二〇〇七(平成一九)年度に天童展示、二〇〇八(平成二〇)年度に鯖江写真展、二〇〇九(平成二一)年度に鯖江展示となる。相手のあることであり、課題も多く出てくるであろうが、ぜひ実現させたいと思っている。

では、具体的に見てゆきたい。事例は、二〇〇四年五月一日日から二七日まで、鳥取市文化センターで開催した「明治大学創立者岸本辰雄展」(以下、岸本写真展と表記)とし、資料的には、「岸本辰雄関係資料調査」(本書八〇〜八一頁)、「パンフレット」(本書一四〜一七頁)、および資料3を利用する。

この岸本写真展最大の意義は、なんとと言っても「明治大学」が「鳥取市と共催により」、創立者の郷里で、展示会を開催したことにある。原則として、資料の準備・設営・撤去は明治大学史資料センターでおこない、会場や備品・消耗品の提供、地元関係者やマスコミなどへの窓口には校友会鳥取県支部や会場の一部である鳥取市民図書館のスタッフの皆さんがあたった。その結果、資料3にあるように地元新聞でも紹介され、多くの見学者を得たのである。

また、写真展終了後、思わぬ反響が相次いだ。まず、二〇〇四年一〇月三〇日から十一月六日まで鳥取県立図書館で開催された「郷土の教育を築いた先達を知るフォーラム」の一環としての「パネル展示」において、岸本辰雄が「鳥取県や我が国の教育に優れた業績」(この段落の出典は、いずれも同フォーラム案内パンフレット)のあった人物として選ばれ、明治大学史資料センター事務室に肖像写

真の貸し出しの要請があった。

また、明治大学校友会鳥取県支部米子境港地域支部からは、二〇〇五年三月に「明治大学創立者 岸本辰雄の集い」の一環として、「郷土の生んだ偉人 岸本辰雄写真展」開催と、「公開講演会」の講師の推薦を要請された(なお、あわせて「明治大学マンドリン倶楽部コンサート」も開催される。なお、この段落の出典は、いずれも「明治大学創立者 岸本辰雄の集い」案内パンフレット)。結果、岸本写真展を基礎としつつも、若干の写真パネルを追加する形で、目下写真展を計画中であり、また「公開講演会」には、明治大学史資料センター所長である渡辺隆喜氏(文学部教授・理事)があたることになった。

両者とも、岸本写真展をおこなったからこそその要請であり、拙い写真展であったにも関わらず、非常に大きな成果を生んだと言える。このように、鳥取の関係者と連携して「地方展」を催すことで、思いがけない反響を実感できたことも、岸本写真展の大きな意義である。

しかし、課題も残された。例えば、基本的に展示の警備に特別に人員を割けなかったために、鳥取の関係者から意見の出た見学者名簿の設置や、明治大学史資料センター発行の刊行物の紹介ができなかった。また、明治大学の職員は設営時と撤去時しか滞在していなかったために、展示会の様子は鳥取側からの報告に拠っていた点もある。特に後者の問題は、おそらく地方で展示会をおこなう上で、今後も最大の課題となろう。見学者の問合せに答えることや、資料管理上のため、また、より一層の地元関係者との交流のためには、全日とはいかなくても、あと数日、大学側から人員を派遣できてい

ればと思うのである。今後の検討課題としてゆきたい。

また、来たる二〇〇六年三月には、今度は写真だけではなく文書資料やモノ資料を含めた本格的な展示会である「鳥取・明治大学・岸本辰雄展」(仮)を、鳥取市歴史博物館で開催する予定で、既に鳥取市歴史博物館の担当者とも数回の打合せをおこなっている。課題も多く出るのであろうが、「大学史展」が経験と反省の上に、よりよい展示会となっていくのと同様、この一連の「地方展」も取り組んでゆきたい。

そして、鳥取↓天童↓鯖江と巡回した後、二〇一〇(平成二二)年に、今度は明治大学で大々的に創立者展を開催したい。ただ、既に「建学の精神とその歴史」(二〇〇一「平成一三」年)を開催しており、およそ一〇年の時間を空けているとはいえ、同じような展示会を開催するのでは魅力も半減してしまう。したがって、「地方展」を開催してゆく過程で、更なる資料の収集はもちろん、調査・研究を進めなければならない。そして、講演会等の関連事業も充実させたい。

また、二〇一一(平成二三)年が、明治大学創立一三〇周年にあたることから、もし学内で一大イベントを組むのであれば、本稿冒頭でふれたような経緯から、この年に開催する方がよいかもしいとも思っている。

(2) 地方展の未来

一連の創立者展が終了した後はどうであろうか。

幸い、明治大学史資料センターには、現在三つの分科会がある。

「尾佐竹猛研究会」(二〇〇四年三月、『大学史紀要』第九号として、

「尾佐竹猛研究Ⅰ」を刊行、二〇〇五年度には、同「Ⅱ」を刊行の予定)、「安藤正楽研究会」、「三木武夫研究会」である。それぞれ、研究成果を単行本として出版するのが目標であるが、当然ながら展示会をおこなうことも可能である。その場合、明治大学史資料センター「企画展」の特徴を活かして、明治大学内での開催と同時に、おのの出身地(尾佐竹↓石川、安藤↓愛媛、三木↓徳島)での開催も準備すべきであろう。これは、有力な「地方展」開催候補地となりえる。

また明治大学には、全世界に散らばる校友や関係者がいる。この人たを追いつけながら、明治大学と地方を結び付け、その紐帯として「地方展」を企画し、できれば地元の校友会と諮って開催する。そうすれば、一層、地方と明治大学の交流も深まってくるだろう。

明治大学史資料センターにとって「地方展」とは、「大学史展示室」完成後の、次なるアピールの媒体となれる可能性があるのである。

おわりに——展望にかえて

本稿の最後に、明治大学の「企画展」の今後について、展望と課題を述べてゆきたい。

周知のように、明治大学には、二〇〇四(平成一六)年四月、新校舎・アカデミーコモン地下一階に、常設の明治大学史展示場である「大学史展示室」が開室した。これは、「大学史資料館」開設に向けた関係者の尽力の成果であり(詳細は村松玄太「開設の経緯」

『明治大学史資料センター事務室報告』第二五集所収、二〇〇四年）、一定の到達点でもあった。これにより、一九九〇年代以降に歴史編纂事務室が中心となって開催してきた「企画展」は、「『明治大学百年史』―筆者）編纂終了後の大学史のあり方を問題提起すること」（鈴木秀幸「大学史展の歩み―明治大学の場合―」『歴史編纂事務室報告』第二三集所収、二〇〇二年）という役割を終えたのだった。しかし同時に、「大学史展示室」の開室（および、明治大学史資料センターの開設）は、新たなスタートでもある。つまり、常設展示場を持った明治大学史資料センターは、今度はこれまでとは違う意識で「企画展」の企画・開催を考える時期に到達したのである。筆者は、今後の明治大学史資料センターからの情報発信としての展示会の柱となるのは、「大学史展」と「地方展」であると思っている。

「大学史展」の場合、おそらく今後も、周年事業の一環として、明治大学内で開催する機会があるだろう。その際は、明治大学史資料センターの側から積極的に事業に参画することで、充分な準備期間と大学当局からのバックアップを確保し、多くの観客を呼べるような環境づくりに努力しなければならない。そして、多くの関係者の心に残るようなテーマを設定し、できれば形に残る図録のようなものを発行してゆきたいと考えている。

また筆者が、特に「企画展」を考える上で興味深く考えているのが「地方展」である。その理由は第二節で述べたとおりであり、地方と大学を繋ぐ紐帯として、十分検討に値するだろう。

このように、今後の「企画展」は、より学外に、地方に向けた、明治大学史資料センターからの情報発信としてゆかねばならない。

また前記二点以外にも、今後の新たな「企画展」のアイディアとしては、横断的の大学史展や、現在明治大学内に存在する「リバティタワー二三階展示計画協議会」における活動が浮かぶ。

まず、横断的の大学史展であるが、現在、国公立や私立を問わず、多くの大学に大学史担当部署が設置されており、京都大学や日本女子大学のように常設の展示場がある大学も増えてきた。しかし現状では、共同の研究会は開催しても、共同の展示会は開催されていない。例えば、明治大学に各大学の資料を持ちより、「日本の大学史展」のような展示会をおこなったらどうであろうか。いきなり、大規模な展示会にしなくてもよい。最初は、各校の学生服をならべるだけでもよいだろうし、各大学のシンボル校舎写真展でもよい。これを、各校持ち回りで開催することは、日本の大学史全体の交流となるし、また相互に刺激し合うことで大学史全体、また担当者の、資質の向上となるだろう。

また「リバティタワー二三階展示計画協議会」（資料4参照）では、二〇〇四年二月から二〇〇五（平成一七）年一月にかけて、明治大学広報部を主幹とする「明治大学箱根駅伝 特別展示」を開催した（一二二～一二九頁の「パンフレット」も参照）。これは、明治大学競走部が、一四年ぶりに東京箱根間往復大学駅伝競走、通称「箱根駅伝」に出場することを受けて企画された展示会であり、明治大学史資料センター事務室も、その業務に携わった。二〇〇四年一〇月の、競走部の「箱根駅伝」予選会突破を受け、急遽企画された展示会ではあったが、多くの方の来場を得た。これは、競走部関係者のご好意により、多数の貴重な資料の寄贈を受けたこと、学内外で競走部の露出が高まり、関心が高まっていたことなどが要因

として考えられる。

「リハビリタワー二三階展示計画協議会」は、不定期な展示会企画グループではあるが、展示ノウハウを持つ明治大学史資料センター事務室の役割は、今後ますます重要となってくるであろうし、筆者としても、積極的に活動に参画してゆく姿勢を持ち続けたい。

さて、以上のように、「企画展」の展望は大きく広がってゆくが、課題も多い。

まずは、ソフト面の課題について述べておく。具体的には、担当職員の資質の向上である。大きなテーマ展は一朝一夕には開催できない。日頃からの努力が必要である。具体的には、資料の収集・保存を前提として、大学史に関する調査・研究を進め、そして展示や刊行物を通じてその成果を公開してゆくことが努力の中身となろう。そのうち、展示ノウハウを身に付ける上で、筆者が重要だと思うのが「小史展」である。

たしかに「小史展」には、第一節で述べたような環境面での課題がある。しかし「小史展」は、かつての「小史展」が「大学史展示室」の準備となったように、大きな展望の上で、意識を高く持つて回を重ねることで、将来の大規模な「企画展」開催にむけ、最高の準備の場ともなりうると思うのである。

最後に、ハード面の課題である。

第一節でも触れたが、まず展示事業独自に執行できる経費的システムを新規に創出する努力をしていかなければならない。このことにより、「企画展」はますます拡大するのである。

次に、より一層の大学資料の収集とその保存問題がある。展示で見せる資料となれば、特にモノ資料の寄贈や寄託が不可欠であ

る。主な対象は、明治大学を卒業後、各地で活躍する校友をはじめとした関係者となる。しかし、現在明治大学史資料センターの資料収納能力は、限界が見え始めた段階にある。積極的に大学資料を、特にスペースを必要とするモノ資料を収集した場合、予想よりも早く能力が限界を超えてしまう。二〇〇五年度、明治大学史資料センター資料室は、明治大学駿河台キャンパス一四号館内で移転するが、収納量はほぼ変わらない。したがって、新規に収蔵スペースを確保することが求められるが、都心型大学の常で、簡単にスペースは確保できないのが現状である。この現状を解決してゆくために、目下、学内各部署と交渉中である。

「資料」・「史料」の用法については様々な議論があるが、本誌では原則として前者をとった。

資料 1

2004/10/18

第17回明治大学小史展 構想

明治大学史資料センター事務室

I 開催案

1. 日 時 2004年11月16日（火）～2005年4月21日（木）
2. 会 場 大学会館1階ロビー
3. テーマ 「記念館からリバティタワーへ」

II 展 示

1. 目 的 明大のシンボル校舎の変化を題材として展示をおこなう。かつてのシンボルであり、また現在通学する学生にとっては過去の施設ともなった、記念館の解体と現在のシンボルのひとつであるリバティタワー建設関係の史料や写真を一堂に展示し、その変化について展示する。
2. 展示資料一覧
3. パンフレット
4. キャプション

III 広 報

1. 資料寄贈者に案内状を送付する。
2. リバティタワーおよび大学会館内のビジョンに広告文を掲出する。
3. 「明治大学広報」に記事掲載。広報部に依頼する。
4. ポスターを下記の場所へ掲出する。
 - (1) 庶務課へ依頼…大学会館前案内スペース、リバティタワー入口案内スペース。
 - (2) 学生課へ依頼…リバティタワー3階掲示板、同17階掲示板。
5. 学内 MICS に案内を掲載。
6. その他 口コミ等。

IV その他

1. 設 営 2004年11月15日（月）
2. 撤 去 2005年4月22日（金）
3. パンフレット 二葉印刷有限会社へ提出 2004年11月2日（火）目標

資料 2

2004/06/23

第 5 回和泉小史展について

明治大学史資料センター事務室

I 開催案

1. 日 時 7月5日(月)～9月30日(木)
2. 会 場 和泉第1校舎1階ロビー
3. テーマ 「第5回 明治大学和泉小史展 明治大学創立者 岸本辰雄」

II 展 示

1. 目 的 和泉校舎に通学する学生および通勤する教職員に対し、大学の歴史の一端について紹介する。
2. 展示資料一覧
 - ① 岸本辰雄肖像(縦)
 - ② 学籍簿(縦)
 - ③ 判事登用試験合格記念写真(横)
 - ④ 南甲賀町校舎(横)
 - ⑤ 岸本辰雄胸像(横)
 - ⑥ 西園寺公望(縦)
 - ⑦ 斎藤孝治(縦)
 - ⑧ 杉村虎一(縦)
3. キャプション
 - ① タイトルパネル(A4版)1点
 - ② 上記写真パネルに付随するもの(8cm×15cmほど)4点 ②～⑤
 - ③ A4版の説明パネル3点 ⑥～⑧
 - ④ 紀要・報告集ポスター、大学史展示室案内パネルを付す。
4. パンフレット
A4版4頁の解説資料を1000部用意する。

III その他

1. 和泉キャンパス側の窓口は、和泉庶務課。
2. パネルをすべて張り替えることが前提。

資料 3

著作権保護のため削除

「日本海新聞」 2004年 5月17日付

資料4

2004年4月1日

リバティタワー展示計画協議会規定（案）

1. 目的

リバティタワーにおける、岸本辰雄記念ホールを中心とした各種展示を計画し、本学の歴史やさまざまな諸活動をアピールし、広く関心を引き起こすことを目的とし、さらに社会の諸問題に本学の主張を意欲的に公布する等のため、「展示計画協議会」を設ける。

この協議会は、創意と工夫による諸種の試みを実施し、効果的な魅力紹介の手段を探る。

2. 構成

構成は以下のとおりとし、必要に応じて他部署の協力を求めることとする。

- 1) 座長 広報担当常勤理事
- 2) 参加部署
 - ① 総務部庶務課
 - ② 総務部大学史資料センター事務室
 - ③ 広報部
 - ④ 管財部管財課
 - ⑤ 学生事務部体育課
 - ⑥ 図書館事務部庶務課
 - ⑦ 博物館事務室
- 3) 事務局 広報部

3. 推進方法

- 1) 審議は、「同心協力」にもとづき全体的な合意を基盤とする。また実施のために構成部署がそれぞれの部門で協力しあうものとする。
- 2) 展示の詳細計画や実施は、軽易な催し以外については専門業者を活用するようにつとめ、当協議会は企画と計画を主要な任務とする。
- 3) 展示計画は常設展示並びに企画展示にわたるものとし、将来に亘る各種展示を実施するための、諸条件整備の検討を行う。

以上